



最弱職の初級魔術師 1

初級魔法を極めたら
いつの間にか「千の魔術師」と呼ばれていました。

α L P H α L I G H T

カタナヅキ
KATANADUKI

アルファライト文庫



ロプス

サイクロプス。おとなしい性格で、人を騙うことはまずない。

謎の美女

妖しい色気を漂わせる美女。なぜかルノに興味を持っている。

コトネ

冒険者ギルドに所属するA級冒険者。情報収集が得意。

ルノ

勇者召喚に巻き込まれて、異世界にやってきた平凡な高校生。ショボい「初級魔法」を駆使して、危険な異世界を生き抜こうと奮闘する。

スラミン

スライム。
水や氷が大好物。
魔石も食べる。

1

霧崎ルノは、目の前の光景に啞然としていた。

先ほどまで教室にいたはずである。それにもかかわらず彼は、見たことのない異様な場所に立っている。

ルノの側には四人のクラスメイトがおり、彼等もまた同様に戸惑っていた。

ルノ達を囲うように、黒いローブに身を包んだ不気味な集団が佇んでいる。手に杖を携えたその集団は、ルノ達にどこか不審げな視線を向けつつ話し合う。

「おおっ、まさか成功するとは……」

「信じられぬ。異世界の住民を呼び寄せたというのか」

「しかし、全員子供ではないか。本当に戦えるのか？」

しばらくして一人の老人がルノ達に近づいてくる。

その老人の格好は特別に豪華であり、歴史の教科書に出てくる中世の王族のようだった。

ルノのクラスメイト達が次々と声を上げる。

「だ、誰ですか、貴方達は!?」

「さ、聡君……」

「な、何だよ、てめえらっ!!」

「お、落ち着きなさいよ……」

怯えるルノのクラスメイトに対し、老人は人懐っこい笑みを浮かべると、突如として跪いた。そして仰々しく告げる。

「よくぞ参られた、勇者殿。どうか我等をお救いください」

「え?」

状況が掴めず、クラスメイトの一人が声を上げる。動揺するクラスメイトをよそに、一人冷静なルノが初めて声を発した。

「……勇者?」

ルノは、老人が口にした「勇者」という言葉に引っかりを感じた。またそれに加えて彼は、このシチュエーションに覚えがあった。

ルノが思いだしたのは、子供の頃に遊んでいたゲームである。

彼は、異世界を訪れた勇者が世界征服を企む悪と戦う、というストーリーのゲームをよくやっていたのだ。今の状況はまさにそういったゲームの展開そのままだった。

ルノはまさかと思いながらも、自分がゲームの世界を訪れてしまったのではないかと考える。

そして、どうして自分がこのような状況に至ったのか、記憶をゆっくりと掘り起こしていった。

× × ×

霧崎ルノは、白鐘学園高等学校に通う高校一年生である。

その日彼は、帰宅中に忘れ物をしたことを思いだし、教室に戻った。教室には、四人の生徒が残っていた。彼等はクラスでも目立っている男女四人組で、全員が幼馴染同士である。

一年生にして野球部のレギュラーに選ばれた、佐藤聡。

クラスの女子の中でも一番人気がある、花山陽菜。

委員長としてクラスをまとめる、鈴木麻帆。

不良生徒として、ある意味で一番悪目立ちしている加藤雷太。

仲良さそうに話し込む四人とは対照的に、ルノは彼等の顔くらいは知っているものの、ほとんど交流したことがなかった。

実際に彼等のほうも、ルノが教室に入ってきたことに反応を示さなかった。
ルノが四人の横を通り過ぎた時、不良の加藤がルノの存在にようやく気づいたように声をかける。

「霧崎じゃねえか。どうしたんだ、こんな時間に？」

「ちよつと忘れ物をして……そっちはまだ残ってたんだ」

ルノはそう口にしつつ自分の机へ行き、置き忘れていた教科書を取りだす。そして返答も聞かずに、そのまま去ろうとする。

「あ、いけない!! もうこんな時間じゃない!? すっかり話し込んでいたわね」

クラス委員長の鈴木の言葉を背に受けつつ、ルノが教室を出た直後——異変が生じた。

「な、何だ!？」

「ま、眩しいよっ!？」

「これは……!？」

「あ、足が動かないわ!？」

四人の足元に魔法陣のような紋様が浮かび上がっている。すでに教室の外にいたルノもその光を浴びてしまう。

「えっ……」

突然、魔法陣から凄まじい閃光が放たれ、教室全体が光に包まれた。

そして全員が意識を取り戻すと、先ほどの状況に陥っていた。

× × ×

ほげぜん
呆然とするルノ達の前に、さつきとは別の初老の男が近寄ってくる。その初老の男は、ルノ達に声をかけた老人に話しかける。

「皇帝陛下、どうやら勇者様は混乱しているようです。ここは私が説明いたしましょう」

「おお、そうか。頼むぞ、大臣」

どうやら最初の老人は皇帝で、今やってきた初老の男は大臣らしい。

「まずは自己紹介から始めましょうか。私の名前はデキンと申します。そしてこちらの御方が、バルトロス帝国の皇帝、バルトロス十三世様でございます」

デキンと名乗った男はそう言うと、優しい笑みを浮かべた。

「バルトロス?」

「帝国って……何言ってるんだよ」

「そんな国の名前、聞いたこともない」

ルノに続いて、不良の加藤、委員長の鈴木が声を上げる。すると、デキンは意味深な笑みを浮かべる。

「当然ですな。何しろ、ここは勇者様が住んでいた世界ではないのですから」

「はあ？ 何言ってるんだおっさん……頭おかしいのか？」

加藤はそう言うのと、睨みつけるようにデキンに顔を近づける。するとすぐさま、デキンの周囲にいた男達が怒ります。

「大臣に何て言葉を!!」

「ば、馬鹿っ!!」

鈴木が慌てて間に入って加藤を引き離す。混乱するクラスメイト達をよそに、ルノは相変わらず冷静なままデキンに向かって質問する。

「すみません。結局、ここはどこなんですか？ まさか、異世界だったり……」

「はあ？ 何言ってるんだよ、霧崎」

急に奇妙なことを言い出したルノに、加藤が馬鹿にするように声を上げた。デキンは目を見開き、ルノのほうへ顔を向ける。

「おおっ!! そちらの勇者様は理解が早いすな。先ほど申し上げた通り、ここは勇者様の住んでいる世界ではありません。我々は勇者様の世界を『テラ』と呼び、我々の世界のこと『マルテア』と呼んでいます」

「テラ……マルテア……?」

ルノはよく分からないまま、デキンの言った単語を復唱する。

野球部レギュラーの佐藤がデキンに尋ねる。

「そ、そんなことよりも、僕達を呼びだしたと言っていました、どうしてこの場所に呼び寄せたんですか？」

「勇者様の疑問はもっともです。なぜ呼びだしたのか……端的に言えば、貴方達に我々を救ってほしいからです。今現在この帝国は、魔王軍と呼ばれる軍勢に追い詰められ、窮地に立たされています」

デキンの発言に、その場は静まり返る。

「ま、魔王だと？ 馬鹿じゃねえのかこいつ」

「加藤!! お前は静かにするんだ!!」

挑発的な態度を取る加藤に周囲の視線が集まったので、佐藤が加藤を止めに入った。ルノはデキンに質問する。

「魔王軍……というのは何なんですか？」

「人類と敵対し、自分達の欲望に忠実な悪のことです。我等は帝国の領地内で暴れ、民衆を恐怖に陥れています」

「それで、どうして俺達を……そのテラの世界から呼び寄せたんですか？」

「もちろん、勇者様方に魔王軍の討伐をお願いするためです。我等は非常に手強く、我々の力だけではどうしようもありません。ですが、この帝国には古から伝わる魔法が存在

するのです！ それこそが、勇者という強大な力を秘めた存在を異界から呼び寄せる召喚魔法陣！ 貴方達は選ばれた人間なのです！！」

感極まったように、デキンは言い放った。

加藤と花山が呆れて声を漏らす。

「何言ってるか、全然分からねえ」

「私も……」

ルノも啞然としてしまったが、気を取り直して尋ねる。

「あの……俺達は元の世界に戻れないんですか？」

「ご安心ください。魔王軍を討伐することができれば、皆さんを帰してあげましょう」

「帰してあげるって……」

ルノはデキンの物言いが引っかけ、表情を強張らせた。デキンはそんなルノの反応を気に留めることなく続ける。

「さあ、つまらない話はここまでにしましょう。これから皆様のステータスを確認するための儀式を行います。こちらへどうぞ」

「ちょ、ちょっと待ってください!! いったい何を言ってる……」

デキンはルノの言葉を無視すると、振り返って部下達に指示する。

「お前達、早く勇者様を儀式の間へ案内しろ!!」

「はっ!!」

すると、無数のローブ姿の男達がルノ達五人を取り囲んだ。ルノ達は逆らうことができず、強制的に移動させられていく。

ルノ等は嫌な予感を覚えつつも、ただ従うしかなかった。

× × ×

数分後、ルノと他の四人は、黒いローブ姿の集団に囲まれて廊下を歩いていた。

先ほどまで彼等がいた場所は、玉座の間と呼ばれる広間だったらしい。またルノ達は、自分達が今、大きな城の中にいると知らされる。

廊下では、甲冑姿の兵士やメイド服姿の女性と何度もすれ違った。それでも五人は、これまでいた世界とは別の世界を訪れていると信じ切れていなかった。

しかし、彼等は現実と直面させられる。

ふと気配を感じ、全員が窓の外に視線を向けた瞬間——明らかに鳥ではない巨大生物が空を飛んでいたのが目に入ったのである。

それは、ファンタジー世界で最も有名な存在、ドラゴンだった。

「オオオオオオオオオオオオ……!!」

全身白い鱗に覆われた巨大な竜が、翼を羽ばたかせて空を飛んでいる。

受け入れがたい光景に五人は圧倒され、言葉を失っていた。

呆然とするルノ達を見て、同行していた黒いローブ姿の男達が誇らしげに言う。

「はっはっはっ!! 勇者殿は白銀竜を見るのは初めてですか? あれはこの地方にだけ

姿を見せる竜種ですぞ!!」

「それにしても、勇者殿が召喚された今日という日に白銀竜が姿を現すとは……これは吉兆ですな」

加藤、鈴木、佐藤、花山、ルノがそれぞれ口にする。

「は、白銀竜……?」

「嘘……信じられない」

「まさか……本当に僕達は……」

「うわあ、綺麗な生物だったね」

「え、あ、うん」

元いた世界では絶対に存在しえない架空の生物である。そのような生物を自分達が目で見ただけ、ここが自分達の住んでいる世界ではないと認めるしかなかった。

歩を進めながら、ルノは黒いローブの男に尋ねる。

「あの……さっき聞いて気になっていたんですけど、この世界には魔法が存在するんですか?」

「はあ……? 仰っている意味が分かりませんが……」

そこへ、デキンが割って入ってくる。ルノの会話を聞いていたらしい。

「ああ、そういえば、伝承では勇者様の世界では魔法が存在しないと聞いておりましたが……本当ですか?」

デキンがわざとらしく大きな声を出したため、他の四人にも聞こえたようだ。四人は「魔法」と聞いて目を見開いた。

加藤がデキンに尋ねる。

「じゃ、じゃあ、俺達も魔法を使えるようになるのかよ!」

「当たり前ですな。まさか魔法を覚えないうで、魔王軍を討伐する気だったのですか?」

「マジかよ。信じられねえっ!!」

「はっはっはっ!! どうやら勇者殿は、魔法に強い興味があるようですな」

デキンは、嬉しそうな顔をする四人を見て薄ら笑いを浮かべる。そうして一行はそのまま歩いていった。

移動を開始してから、数十分ほど経過した。

五人が到着したのは、床に魔法陣が刻まれた広間だった。

広間の周囲には七つの柱が立ち並び、それぞれの柱の上には水晶玉があった。緑、赤、青、黄、茶、白、黒の七色である。

広間の中心には台座があり、その上では無色の水晶玉が宙に浮かんでいる。

デキンが物々しく告げる。

「ここは、儀式の間と呼ばれている広間です。魔術師だけしか立ち入ることができません。今から勇者様方の適性を検査し、ステータスの魔法を覚える儀式を行います」

「ぎ、儀式？」

ルノが疑問の声を上げると、デキンは不気味な笑みを浮かべて答える。

「怖がる必要はありません。中央に存在する台座の水晶玉に手のひらを翳すだけでいいのです。それで皆様は天使の加護を授かるでしょう」

「天使の……加護？」

聞き覚えのない言葉を聞き、ルノは首を傾げる。他の四人も戸惑っている、デキンは説明しだす。

「この世界では成人すると、ステータスの儀式を受けます。これによって、自分に適した職業、現時点の能力を確かめることができます。そしてそれと同時に、スキルと呼ばれる

技能も身に付けられるのです。さらには、天使の加護を得ることができ、魔法を扱えるようになるのです」

「ステータスとかスキルとか……何だかゲームみたいな話になってきたな」

加藤が感想を言うと、デキンは笑みを深めてさらに告げる。

「そのゲームというのは何か分かりませんが、今の勇者様は何の力も持っていません。伝承によれば、儀式によって隠された能力が目覚めるはずですよ」

普段は冷静な鈴木が、はしゃぐように尋ねる。

「じゃ、じゃあ、私達も本当に魔法が使えるんですか？」

「はあ……それは今言ったはずですが」

デキンは呆れたように、ため息を吐いた。

デキンの態度が段々悪くなってきたことに、ルノ達は違和感を覚えた。

ともかくデキンの言葉が事実ならば、儀式を受ければ魔法を扱えるようになるらしい。ルノは意を決して、最初にやってみることにした。

「……ここに手のひらを翳せばいいんですよね？」

「その通りです。さあ、何も恐れる必要はありません」

ルノが空中に浮揚している水晶玉に近づくと、加藤と花山が心配そうに声をかける。

「お、おい!! 本当にやる気かよ？」

「危ないんじや……」

ルノは覚悟を決めて、手のひらを水晶玉の上にやる。

その瞬間、周囲の柱の上の七色の水晶玉が光った。ルノの身体が光に覆われ、周囲の人々が騒ぎだす。

「こ、これは!」

「すべての水晶石が反応している!」

「まさか、全属性を扱えるというのか!」

ルノは、どうして人々が驚いているのか理解できなかったが、自分の肉体に起きている異変を感じて戸惑う。

熱い液体が注ぎ込まれていくような感覚が全身を襲ったのだ。それと同時に、ルノの左手の甲に奇妙な紋様が浮かび上がる。それは、周囲のロープを纏った男達が所持している杖のようなデザインだった。

しばらくして、ルノの視界にパソコン画面のような半透明のディスプレイが出現する。

「うわっ!」

ルノが声を上げると、加藤と花山が心配してくる。

「ど、どうした!」

「大丈夫なの?」



「いや……これ、見えないの？」

どうやらルノの視界に現れた画面は、他の人間には見えないらしかった。

ルノは、ひとまず表示されている内容を確認する。

それはゲーム等ではよく見かけるものだった。「ステータス」と表示された画面は、次のようになっていた。

霧崎ルノ

「職業」初級魔術師（固定）

「状態」普通

「SP」1

「レベル」1

「技能スキル」

・翻訳——あらゆる種族の言語、文字を理解できる。

「戦技」

・風圧——風属性の初級魔法（熟練度…1）。

・火球——火属性の初級魔法（熟練度…1）。

・氷塊——水属性の初級魔法（熟練度…1）。

・電撃——雷属性の初級魔法（熟練度…1）。

・土塊——地属性の初級魔法（熟練度…1）。

・闇夜——闇属性の初級魔法（熟練度…1）。

・光球——聖属性の初級魔法（熟練度…1）。

「固有スキル」

・なし

「異能」

・成長——経験値を通常よりも高く獲得できる。

ステータスには、ゲームで定番のHPやMPといった項目はなかった。あるのは、現時点のレベルや能力だけである。

ルノが気になったのは、職業欄の「初級魔術師」だ。それは、ゲーム等でも見たことのない職業だった。

ルノはステータスを見ながらデキンに言う。
「あの、画面が表示されたんですけど……」

「それで成功ですな。何が書かれているか読み上げてくれますか？ 我々には他人のステータス画面を確認できないのです。どうか詳細に教えてくだされ」

「私が筆記します」

羊皮紙ようひしを手にした男がいつの間にか、ルノの近くにやってきていた。

ルノがステータスの内容を報告している間に、他のクラスメイト達も彼と同様に儀式を行った。

クラスメイト達が、ステータスを見て驚きの声を上げる。

「おおっ!? す、すげえっ」

「信じられない」

「まさか本当に」

「えっと……大魔導士？」

デキンがクラスメイト達に告げる。

「皆様も表示された内容をお教へください。修得した職業によつては訓練の内容も変えま
すので」

「訓練？」

デキンが呟いた言葉に、ルノは反応する。

そこへ、ルノのステータスを書き終えた男がデキンのもとにやってきて、慌てたように羊皮紙を見せる。

「デ、デキン様!! この者のステータスが……」

「どうした急に……こ、これはっ!？」

デキンは羊皮紙を見て、目を見開いた。そして、羊皮紙とルノの顔を交互に見比べ、ルノのもとに近づく。

「キリサキ殿!! 表示された画面は、この内容で間違いがないと!？」

「は、はい？」

デキンはルノに羊皮紙を見せながら尋ね、天を仰ぐように言う。

「……そんな馬鹿な。どうして天使の加護ではないのだ。伝承では確かに勇者は……」

「デキン様!! 他の方は確かに天使の加護を受けています!!」

そこへ、別の男がデキンに報告してきた。すでにクラスメイトのステータスは調べ終えていたらしい。加藤と鈴木が首を捻る。

「え？ 何の話だよ」

「どういうことですか？」

デキンはぶつぶつと呟きながら羊皮紙をぐしゃりと握りしめる。そして何か気づいたよ

うに、ルノのほうを振り返った。

「キリサキ殿、貴方が召喚された時の状況を教えてくれませんか？」

「え？」

「もしかしたらキリサキ殿は……他の方に巻き込まれて召喚されたのでは？」

クラスメイト達が声を上げる。

「はあっ!？」

「ど、どういうことですか？ 霧崎君が巻き込まれたって」

ルノは、この世界に召喚された時の状況を思いだしてみた。

魔法陣が出現した際、ルノはクラスメイトの近くにいた。みんなの足元には魔法陣があったが、自分にはなかった。それから魔法陣の発する強い光に呑み込まれ、気づくところらの世界に降り立っていた。

ルノはなぜか気まずそうな顔をして口を開く。

「まさか……」

「その表情は……どうやら心当たりがあるようですな。ふんっ！ ならば話は別だ！ 勇者を召喚したはずが、ただの一般人を呼び寄せてしまうとはな」

デキンの口調の変化に、クラスメイト達が驚いて後ずさる。

「な、何だよ、急に……」

「いったい何がどうしたんですかつ!？」

デキンは周囲からの視線に気づくと、慌てて態度を改める。

「おっと……これは失礼。私としたことが冷静さを失ってしまいました。ともかくです。

キリサキ殿は、我々が呼びだした勇者ではないようですな」

デキンがそう言うのと、周囲の視線がルノに向けられる。

デキンは不愉快ふふかいそうな表情のままさらに続ける。

「他の皆さんも見たのでは？ 召喚される時、皆さんの足元には魔法陣が浮かび上がった。ですが、キリサキ殿にはそれがなかった」

デキンは軽蔑けいべつするようにルノを睨みつける。

「勇者ではないと分かった以上、キリサキ殿の能力は期待できません！」

「能力が期待できないって……どういふことなんですか？」

思わずルノが尋ねると、デキンは苛立いらだたしそうに言う。

「ちっ……仕方ないな。いいか、よく聞け」

デキンがルノに教えたのは、次のような内容だった。

初級魔術師は希少きせうであるものの、はずれ職である。長所といえは、魔術師の中でトップクラスの魔力容量を持ち、治癒ちゆ魔導士のように回復魔法を多少扱えること。だが、それ以外すべての点であらゆる職業に劣るという。

そもそも魔術師は、強力な魔法を使えるからこそ後方支援役として有用なのだが、初級魔術師は初級魔法だけしか使えないため、それが期待できないとのことだった。

「初級魔法……？」

「一般的には『生活魔法』と呼ばれる、普通の人間でも扱える魔法だ。火の玉を生みだしたり、氷の塊を作りだしたりする程度のな！ 本来、魔術師は『砲撃魔法』を覚えられののだ。砲撃魔法こそが魔術師の魔法。初級魔術師はこの砲撃魔法を覚えない……何しろ、初級魔法専門の魔術師だからな！」

ルノはちょっとした反発心から、少し言い返してみる。

「……でも、魔力容量が多いのは良いことなんじゃ」

「初級魔法自体が大して魔力を消費しない生活魔法だ！ せいぜいタバコの火を点ける程度の魔法で、魔力などいらん。そんなもので魔物と戦えると思うのか？」

「……」

「信じられないなら試してみるがいい。ステータスに表示されている魔法の名前を唱えるだけで、魔法は発動できるからな！」

デキンに強い口調で促され、ルノは恐る恐るステータス画面を開く。そして表示されている魔法を確認すると、そのうちの一つを唱えてみる。

「『風圧』」

ルノの手のひらから、小さな竜巻が発生した。

その竜巻は、ルノの目の前にいたデキンに襲いかかった。風を受けたデキンは身体をよろめかせ、ルノ自身も体勢を崩して倒れてしまう。

「ぬおっ!? き、貴様っ!!」

「うわっ!?」

怒ったデキンが杖を振り上げ、ルノに殴りかかろうとすると、佐藤が止めに入る。

「霧崎君!?」

「いったい何が……あ、あれ……？」

ルノは地面に腰を下ろしたまま、目を回していた。

「霧崎君、どうしたんだ？」

「大丈夫!?」

「いや、急に身体から力が抜けて……」

佐藤に続いて花山も心配してくる。ルノがぐるぐる回る視界に戸惑いながらそう口にする、デキンは蔑むように告げる。

「ふんっ、それは魔力枯渇と呼ばれる状態だな。魔力を消耗しすぎると、精神面・肉体面に影響が出てくるんだ。今の魔法を使っただけでそうなってしまうとは」

ルノはクラスメイト達に手を貸してもらい、何とか立ち上がる。

デキンは嫌味^{いやみ}ったらしくため息を吐きだすと、小馬鹿にしたような態度を取る。

「はあ……どうやら本当に、ただの一般人が召喚されたようだな。まあいい、他の勇者様を訓練場にお連れしろ。私はこの男を処理する」

「はっ!!」

デキンに指示されて集まってきた男達が、クラスメイトを取り囲む。

「ちよつ、ちよつと待ってください!! 何をするんですか!？」

「くそつ、離しやがれっ!!」

「いやつ、やめてっ、どこ触^{さわ}ってるのよ!？」

「うわああっ!？」

クラスメイト達が大勢の男達に連行されていく。その光景を目にしながら何もできず、ルノは声を上げる。

「みんなっ」

「貴様はこつちだ。おい、この男を城の外に追い払え!!」

一人残されたルノに向かってデキンはそう言うと、見下^{みだ}した態度のまま兵士に指示を出す。

「はっ」

「ちよ、ちよつと!？」

兵士達がルノのもとに駆け寄り、彼を無理やり拘束^{こうそく}しようとした時——広間に女性の声が響^{ひび}き渡った。

「おやめなさい!!」

その場にいた全員が、声のほうを振り向く。

そこには、銀色のドレスを纏った美しい女性が立っていた。また、彼女の側には日本人のような黒髪の女騎士が付き添^そっている。

銀色のドレスの女性が声を上げる。

「デキン大臣!! これは何の騒ぎですか?」

「こ、これは王女様!! 本日もお美しく……」

「私の質問に答えなさい!! いったい何をしていたのですか?」

王女と呼ばれた女性は、デキンを責めるような厳^{きび}しい目をした。

王女は金色に輝く髪の毛を腰元まで伸ばし、人形のように整った顔立ちをしている。瞳は宝石のように美しい碧眼^{へきがん}。胸は大きく膨らんでいるが、腰はキュッと細い。その身体は女性らしい滑らかな曲線を描^{えが}いていた。

彼女はデキンの側にいるルノに視線を向け、その服装を見て目を見開いた。そして、慌

てて跪^{ひざまず}きだしたデキンを問いたです。

「この方は？ もしや、今日召喚されたという勇者様ではないのですか？」

「い、いえ。この男は違います！ 本当の勇者様は現在には訓練場のほうに……」

「どういうことですか？ では、この御方は何者なのですか？」

「そ、それは……」

デキンは冷や汗を流し、先ほどまでの高圧的な態度から一変してあたふたしだす。

ルノは戸惑いながらも王女に視線を向ける。そして、彼女に助けを求めて話しかけようとしたところ、先にデキンが口を開いた。

「こ、この人物は勇者様の召喚に巻き込まれた一般人なのです！ ですから、勇者としての力は何一つ持っていません！」

「一般人……!? どういうことですか？」

「じ、実は先ほどこの場所ですべて勇者様全員に儀式を行ったのですが、この男の職業が初級魔術師です！」

「初級魔術師？」

「あの不遇職の……」

王女が驚いたような表情を見せ、隣にいた黒髪^{くろがみ}の女騎士は眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せる。

彼女達はルノに同情するような視線を向けた。デキンはわざとらしく辛そうな雰囲気^{くわんいき}を

出しながら口を開く。

「彼が一般人だったことは残念ではありますが、我等としても戦力にならない者をこの王城に置いておくことはできません。そこで、彼には城外で暮^くらしてもらうよう、話し合いをしていたのです」

「本当ですか？ 私には兵士を使って彼を追いだそうとしていたように見えました」

「そ、そんなことはありませんっ」

王女に指摘され、デキンは大げさに首を横に振って否定した。王女はため息を吐きつつ、ルノのほうへ顔を向ける。

「……その御方、名前は何とのですか？」

「え、あ、霧崎ルノです」

彼女は、ルノを安心させるように優しく微笑^{ほほえ}みかけ、彼の手を取った。

「私の名はジャンヌと申します。一つお聞きしたいのですが、こちらの大臣の言葉に嘘偽^{うそいつはり}りはありませんか？ もし彼が嘘を吐いて誤魔化^{ごまか}そうとしているのなら、後で罰を与えなければなりません」

「お、王女様!! そのような男の話など……」

慌てたデキンが、ルノとジャンヌの間に割って入ろうとする。しかし、側にいた女騎士が腰の長剣に手を伸ばして、デキンを止める。

「貴公は黙^{だま}っていてもらおう。それとも、まさか王女様に異議を申し立てるつもりではないだろうか？」

デキンは護衛^{ごゑい}の女を忌々^{いまいま}しげに睨^くみつけ、悔^くしげに齒^はを食い縛^{しば}った。

ルノが、このジャンヌならこれまでの経緯^{けいゐ}を伝えれば助けてくれるのではないかと考えた時——ジャンヌは握りしめていたルノの手を離し、口元を押さえて膝^{ひざ}をついた。

「うつ……げほっ、かはっ……!!!」

「えっ!？」

「王女様!？」

ルノとデキンが果然とする中、ジャンヌは胸元を押さえて屈^かみ込む。女騎士が駆け寄って、ジャンヌに肩を貸す。

「大丈夫ですかっ？ またご病気が」

「へ、平気です……く、こんな時にっ……」

ジャンヌはすでに意識を失いかけていた。

女騎士がデキンを睨^くみつける。

「私は王女様を病室^{びやうしつ}に運びます。デキン大臣！ 先ほどの話が本当ならば、その御方を城外へ案内し、当面の生活^{せいかつ}を賄^{まか}える資金を渡すはずですよね!？」

「くっ!! わ、分かってる!!」

女騎士に厳しく問われ、デキンは反射的に答えた。

「それを聞いて安心しました。さあ、王女様はこちらへ」

「も、申し訳ありません……」

黒髪の女騎士は、王女を連れて広間を立ち去っていった。

取り残されたルノは、彼女達の後ろ姿を呆然と見つめていたが、デキンが自分を睨^くみつけていることに気づく。

ルノが恐る恐る振り返ると、デキンは忌々^{いまいま}しげに舌打ちしながら懐^{ふところ}に手を伸ばした。

デキンが取り出したのは茶色の小袋である。

デキンは、その小袋を地面に投げつけた。

「さっさと拾えっ!! 王女様のご厚意^{こうい}に感謝しろ。それだけあれば数日は過ごせるだろう。その間に、仕事^{しごと}を探^{さが}して生き残る術^{すべ}でも探せっ!!!」

「えっ?？」

「ちいっ……さっさと出ていけ!! ここを真^まっ直^すぐ進めば正門に出て、そこから先は城下町が広がっている。二度とこの城に戻ってくるんじゃないぞ!!」

デキンは言いたいことだけ告げると、不機嫌な表情のまま立ち去っていった。

ルノはしばらく呆然としていたが、はっとして我に返ると地面に落ちていた小袋を手

取った。袋の中を見てみると、銀貨と銅貨が入っている。硬貨を見つめながら、ルノはこれまでのことを思い返す。

「いったい何だったんだ……」

異世界に召喚されたかと思ったら、強制的に奇妙な儀式を受けさせられた。

その儀式で能力が低いと判断され、城の人の態度が急変。城から追いだされかけてしまった。それからなんと王女が現れ、大臣から硬貨の入った小袋を投げつけられた。そして、自ら出ていくように指示され……とにかく、短い間にいろいろな出来事が起きた。

ルノはまだ混乱していたが、早くここから出ないといけないということは分かった。改めて小袋の中身を確認すると、城の正門に向かう。

「これ、いくらぐらいなんだろう？」

小袋の中には、銀貨が数枚と銅貨が十数枚入っていた。

しかし、それぞれの硬貨の価値が分からないので、これでどのくらい生活できるのか判断できない。またそれ以前に、城下町に出てどう暮らしていけばいいのか、まったく想像できなかった。

デキンは最後に仕事を見つけると言っていたが、ルノは元の世界では普通の高校生に過ぎない。こちらの世界でちゃんとした職を見つけれられるのかさえ不明だった。

誰かに助けを求めたいが……

ルノはふと気配を感じて周囲を見渡す。

すぐに後方から自分を尾行している兵士がいることに気づいた。兵士は一定の距離を保ちつつ、ルノの様子を窺っている。

デキンの指示で、ルノが城を出ていくのかどうか見張っているのだろう。

これでは助けを求めるのは不可能だ。

人の好きそうな皇帝か、あるいは先ほど助けてくれた王女に会えば城に残してもらえるかもしれないが……兵士に監視されているのは城内を歩けない。

いろいろと考えている間にもルノは歩き続け、王城の城門の前までやってきてしまった。門の左右には、見張りの兵士がいる。

兵士はすでに報告を受けていたのか、何も語らずに首だけを動かして、ルノに城門の外に移動するように指示した。

ルノはため息を吐き、歩を進める。

「はあ……」

ルノが門を潜り抜け終えると、すぐに扉が閉じられた。

本当に、彼を受け入れるつもりはないらしい。

ルノは一度だけ振り返ったが、その場に残っても無駄だと悟り、そのまま城から立ち去った。

2

「うん……まあ、分かってはいたけど、日本じゃないな、ここ」

ルノは城下町の光景を見て、改めて自分がいる場所が日本ではないことを再認識した。正確に言えば、日本どころか、自分が知っている世界ですらない。

彼の前には、頭に獣の耳を生やし、尻から尻尾を生やした存在が歩いている。

さらには、身長が軽く三メートルを超える巨人、耳が細長い容姿の美しい種族などが堂々と行き来していた。どう考えても普通の人間ではない。

そんな光景を目の当たりにし、ちよつとパニックになったルノは頭を押さえつつ、人気の少ない路地裏に逃げ込んだ。

自分がマルテアという異世界にいることは、先ほど王城で教えてもらったので分かっている。ルノは頭では理解したつもりだったが、

だが、それでもその現実を受け止めきれずにいた。

「どうすれば元の世界に戻るんだ……」

彼はそう呟くと、召喚に巻き込まれる直前に見た魔法陣のことを思い出す。

この世界で最初に訪れたのは、王城の玉座の間である。そこには、皇帝と大臣の他に、魔術師と思われる人達がいた。

彼等であれば何か知っているかもしれない。ルノはそう思いついたものの、それと同時に王城に戻る危険性について考えた。

ルノは思案しつつ、現状の自分の能力を調べることにした。

「ステータス」

ルノの目の前に画面が表示される。

ルノはスマートフォンを操作するように、指先で画面に触れる。このような状況でありながら、気分的にはゲームでもしているような感覚だった。

霧崎ルノ

「職業」 初級魔術師 (固定)

「状態」 普通

「SP」 1

「レベル」 1

「技能スキル」

- ・翻訳——あらゆる種族の言語、文字を理解できる。

「戦技」

- ・風圧——風属性の初級魔法（熟練度…2）。
- ・火球——火属性の初級魔法（熟練度…1）。
- ・氷塊——水属性の初級魔法（熟練度…1）。
- ・電撃——雷属性の初級魔法（熟練度…1）。
- ・土塊——地属性の初級魔法（熟練度…1）。
- ・闇夜——闇属性の初級魔法（熟練度…1）。
- ・光球——聖属性の初級魔法（熟練度…1）。

「固有スキル」

- ・なし

「異能」

- ・成長——経験値を通常よりも高く獲得できる。

「あれ？ 熟練度が上がってる。あ、さっき魔法を使ったからかな？」

初めてステータスを見た時『風圧』の熟練度は1だったはずだが、2に上昇していた。

ルノはさっそく試してみようと思い、手のひらを前に構える。そして先ほどのように

『風圧』の魔法を発現させてみる。

『風圧』！！

吹き飛ばされないように気をつけつつ、手のひらに意識を集中させると、さっきよりも強い『風圧』を生みだせた。

「ん？ あんまりきつくない？」

王城で『風圧』を発動させた時は、立てなくなるほどの疲労感に襲われたが、今回はそういう感覚はなかった。

熟練度が上昇したことが関係しているのだろう。ルノは深くは考えず、そう納得することにした。

「他の魔法はどうなんだろう」

それから彼は、画面に表示されていた初級魔法をすべて試していった。

『火球』……おおっ」

手のひらから火の玉が現れる。火の玉は自分の意思で自由に動かすことができた。『風圧』と比べて長時間の発動が可能で、数十秒は保たせられるようだ。

「次は……『氷塊』」

彼の手元に、宝石のように輝く氷の塊が生まれる。

この『氷塊』も『火球』と同様に操作でき、大きさも変えられた。大きくしたり複雑な形にしたりすると、多くの魔力を消費するらしい。

『氷塊』の操作で遊びすぎてしまい、ルノはちよつとふらついてしまう。休憩を挟んだ後、四つ目の魔法に挑む。

「ふうっ……よし！『電撃』!!」

魔法名を唱えた直後、手のひらに電流が迸った。

ルノは手のひらに現れた電流を見て感心しつつも、自分が感電しないことを不思議に思う。「そういえば今までの魔法もそうだったな。身体に触れても何も起きなかった」

実際に、『風圧』で手を切ったり、『火球』で火傷したり、『氷塊』で凍傷になったりすることはなかった。

彼は、唱えた魔法で自分自身は傷ついたりしないのではないかと考え、試しに電流を發していないほうの手で電流に触れてみる。

思った通り痛みは感じなかったが、電流がルノが着ている学生服の上を走り、バチバチ

と火花を散らす。

「あちちっ！ ああ、少し焦げた」

学生服の袖が軽く焦げてしまった。

ともかく、自分が生み出した魔法では自分の肉体は傷つかないようだ。ただし、装備している物に関してはその限りではないらしい。

続いて、ルノは土属性の初級魔法を唱える。

「『土塊』!! あれ……『土塊』?」

だが、魔法が発動する気配はない。

不思議に思った彼は、ステータス画面を開いて『土塊』の項目を読む。土に関係する魔法ということは知っているがそれ以上のことは分からない。

ルノはふと思いついて、地面に手のひらを置いてから再び唱えてみた。

「『土塊』」

手のひらから紅色の光が放たれ、前方の土砂が盛り上がる。その一方で、手前の地面が軽く沈んでいった。

「今までの魔法と比べると、何だか地味だな」

そう言いつつもルノは、地面を陥没させて落とし穴を作ったり、地面を盛り上げて土壁を作ったり、意外と便利そうだと考えた。

立ち読みサンプル はここまで